

## 安積桑野会総会あいさつ

平成27年9月5日(土) 15:45～  
於安積歴史博物館講堂

平成27年度安積桑野会総会が、130周年記念式典が盛大に挙行された昨年に引き続きここ旧本館講堂で開催できますこと、誠におめでとうございます。

昨年は、大勢の同窓生の方々に130周年記念式典に出席をいただき、そして、盛り上げていただきまして誠にありがとうございました。  
改めてお礼申し上げます。

学校の近況については、「安高PTAだより」「安積桑野会だより」＜今回は未配布＞に掲載されていますので、その詳細につきましては、6月までの部活動の状況等は、そちらに譲りますが、少しだけ紹介します。

～文化系部活動の活躍（安高PTAだより）～

また、128期生の進路状況について少しお話しします。

～128期生の頑張り～

昨年の総会でも、生徒数のデータを紹介しました。

H27 1学年8クラス＝24クラス 959名（男549名、女410名）

男57%

1クラス当たり40名

### 安積の生徒数ピーク

H 3 (S49生まれ・106期) 524名入学、11クラス 1541名  
(第2次ベビーブーム) 1クラス当たり47名

＜現在の男子生徒数は、約36%＞

S41 (S23生まれ・80期) 493名入学、9クラス 1478名  
(第1次ベビーブーム) 1クラス当たり55名

今後、少子化に歯止めがかからない中で、如何に安積の教育活動を充実させるかが大きな課題と捉えています。

さて、平成27年度、本日の総会におきまして、会長さんを含めた役員改選があると聞いております。今年は、次の140周年に向けてスタートする131年目に当たる年ですので、その意味からも新たな体制で新たな一步を踏み出すことは、大変意義のあることではないかと考えております。

同窓生の皆様にも、何かと御協力をいただくことがあるかと思いますが、今後とも本校の教育活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

安積桑野会の益々の発展と会員の皆様が、140周年、150周年に向けて、益々お元気で活躍なされますようお祈りいたしまして、挨拶と致します。

本日は、安積桑野会総会の開催、誠におめでとうございます。

## 懇親会挨拶

平成27年9月5日(土) 17:30～

於ホテルハマツ

昼の講演会では、本校80期生で元第29代航空幕僚長・田母神俊雄氏の「誇りある日本を取り戻そう」と題する講演を聴かせていただきました。

この懇親会の当番は、安藤智重さんたち99期ですが、その安藤さんも、総会の進行を務めた89期の高橋金一さんたちも色々なところで書いていますが、安積の地が生んだ江戸末期の儒学者安積良斎はもっと知られてもよいのではと思っています。私も生徒たちに良斎の話をして生徒会誌に書いたりしているのですが、その際、良斎の師であった儒学者佐藤一斎の言葉を紹介しています。

**「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂ふることかれ、ただ一燈を頼め。」**

一般的には、「たとえ小さな光でも、大きな闇ではなく光に目を向けるべし。その小さな光を信じて歩み続けよ。」と解釈されますが、この一燈の光については、志、希望、夢、愛など様々に読み解くことができます。講談社学術文庫の訳者は、「自己の堅忍不拔の向上心」としていますが、皆さんは如何でしょうか。

まさに、東日本大震災とそれに続いた原子力災害に苦しむ福島県の人々が、しっかり噛みしめるべき言葉ではないかと思います。

自己の堅忍不拔の向上心

堅忍不拔（我慢強く堪え忍び、心を動かさないこと。）

この懇親会で、安積桑野会会員の皆様がさらに強い絆で結びつき、140周年、150周年に向けてますますお元気で活躍なされますようお祈りいたしまして、簡単ではありますがご挨拶といたします。

近年、安積の地が生んだ江戸末期の儒学者<sup>あさかごんさい</sup>安積良斎の名をよく耳にするようになりました。良斎の門を叩いた人々は大変多く、二千名を超える門人帳には、今年の大河ドラマで話題になっている<sup>ぎゅうそう</sup>吉田松陰、高杉晋作や岩崎弥太郎（三菱創始者）等、近代日本の礎を築いた錚錚たる人物が名を連ねており、福島県人は、少なくとも郡山の間人は彼のことをもっと知る必要があるのではないのでしょうか。

さて、その良斎が江戸に出て学んだのが佐藤一斎でした。一斎の弟子には、良斎の他にも、勝海舟、坂本龍馬らの逸材を育てた佐久間象山等がいて、良斎同様もっと注目されてよい人物ですが、その一斎の言葉を紹介します。

一燈を提げて暗夜<sup>やみ</sup>を行く。

暗夜を憂ふこと勿れ、

ただ一燈を頼め。（言志晩録<sup>いんしばんろく</sup>二条）

一般的には、「たとえ小さな光でも、大きな闇ではなく光に目を向けるべし。その小さな光を信じて歩み続けよ。」と解釈されますが、この一燈の光については、志、希望、夢、愛など様々に読み解くことができます。講談社学術文庫の訳者は、「自己の堅忍不拔<sup>けんじんふたつ</sup>の向上心」としていますが、皆さんは如何でしょうか。

私事で恐縮ですが、なぜかわたしは周年行事に縁がありまして、安積の生徒として90周年を体験し、教師として110周年に立ち会い、そして昨年は校長として130年という節目の年に巡り会うことができた幸せにどれほど感謝しても足りません。（この20年刻みのサイクルで行くと、150年にも何らかの形で関わることができれば良いなと思っています。77歳ですので生きていればですが・・・）